
bond of flame ~ 炎の絆 ~

緋村 螢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

bond of flame 炎の絆

【Nコード】

N7045A

【作者名】

緋村 螢

【あらすじ】

火炎瑞稀・神良聖純・雷夢出雲の日常をまず。絡み合った友情の物語。旅に出る準備段階の物語。時には愛の物語。

第一章 理由（前書き）

長くなりそうですが、第一部ではまだ旅にはでません。では、『
ond of flame』第一章「理由」お楽しみ下さい。
b

第一章 理由

第一章 理由 ｝

いつも、平和なこの村の端に赤い屋根の2階建ての家があった。

その家には、ある伝説の本を持つ者、

火を司る神とされる瑞稀

水を司る神とされる聖純

雷を司る神とされる出雲

その、三人が住んでいるのだ。

本人等は本は持っているが、神だということは知らないらしい。

説明はこれくらいにして、

・・・なにやら、今日は騒がしい。

聖純「瑞稀！起きてくださいよ。」

瑞稀「ん？朝かあ？・・・もう少しくらい寝かせろよ。」

聖純「朝食当番、瑞稀ですよ？」

瑞稀「ゲッ・・・ 何作れって？」

聖純「それは瑞稀にお任せします。」

出雲「飯まだ？おなかすいた！。」

瑞稀「・・・ダー、もう！作れば良いんだろー！！その代わり、文句言うなよ。」

調理中

俺等・・・神良しんら 聖純せいじゅん・雷夢らいむ 出雲いずも

そして、俺、火災かえん 瑞稀みずきは同居しています。

まあ一応女の俺が何故こんな奴等と一緒にいるかと言うと、互いを信賴しているのが一つ。

もう二つあるんだけど、もう二つは・・・

瑞稀「完成〜！」（トースト一枚、りんご・・・以上！）

出雲「パク・パク……」(口に入れば何でも良い)

聖純「普通に食べれますけど……少ないですね。」

瑞稀「文句言っとなってば〜!」

伝説と、約束だ!!

伝説には……

『この世には伝説の本が四つある。

それは、水の本、火の本、雷の本、風の本。

この中の水・火・雷が揃い心が一つになれば道が開く。』

ってな。だから、約束したんだ。

もう、「死ぬ……」と言ってた俺等だけと一緒に頑張ろうってさ!

瑞稀「朝食終了!!……さてあの伝説の続きを読もうかな〜。」

出雲「もう、本揃ってんでしょ〜。」

瑞稀「え?あ、ああ。伝説の中の風の本ってのが気になるけどこれ

から調べる。

それに…つか、何も起こらないのは気持ちが揃ってないんじゃないの？」

出雲「だったらさ！旅！行こうよー！た〜び〜！…！」

聖純「旅・・・ですか。」

瑞稀「良いけど、無計画？」

出雲「そー。その方が心が1つに…！」

聖純「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ。」

瑞稀「・・・・・・・・・・・・・・・・・・別に良いけど？」

出雲「え？ホント？ワイー！ワイー！！」

聖純「み・・・瑞稀まで。仕方ありませんね、行きましようか、旅。」

出雲「ワイー！さあ！行こう！」

瑞&聖「おい（あ）・・・ちょっと待てよ（待ってください）！！」

聖純「せめて一週間後で・・・。」

瑞稀「そうそう。」

出雲「・・・・・・・・ハイ。」

って事で、半強制的に旅に出る事になったのだった。

第一章 理由（後書き）

第一部もどのくらいになるかは分かりませんが。付き合ってください。

第二章 仲間（前書き）

いつものんきな瑞稀・聖純・出雲に波乱な仲間が？！

第二章 仲間

第二章 仲間

瑞稀「さあ、色々邪魔されたけど伝説の続きを・・・

『水・火・雷の本を持つ三人が出会い丁度百日目、

風の本を持った人物が訪れる。

そしたら、強制的に仲間になるだろう・・・』

え？・・・なあ、聖純。俺らが会ったのっていつだったけ？

聖純「えーと、ですね・・・一月二十四日ですね。それがどうかしました？」

瑞稀「今日が・・・五月二日・・・丁度・・・百日目!」

出雲「Z・・・Z・・・Z・・・」

聖純「そうですね・・・何か祝います？」

瑞稀「・・・・・・。」

ピンポン

出雲「ん？どろぼー？」

聖純「それでは、インターホンは鳴らさないでしょう。」

テクテクテク……

ガラッ！

??「お前らか？伝説の本持つてるの。」

出雲「え？何で分かつ（モガ！）」（聖純に口を押さえられる）

??「オレは、お前らと同じように風の本を持つてる。」

聖純「風の本？！ど、どういうことですか！？瑞稀！」

瑞稀「ん〜、今日は、俺らが会って丁度百日目。」

伝説には、今日、風の本を持った人が現れるって書いてあるんだ。」

??「よく知ってんじゃねーか、チビ共のくせに。」

三人「……三人のチビチビ言うな攻撃ー！！」「」

シャキーン

三人「……刀！！」「」

攻撃途中で止まる。

??「ハハハ！良く出来た小僧共だぜ！

っで、オレを仲間にすんのか？しないのか？」

聖純「なんなんですか？いきなり。」

出雲「そっだーそっだー！」

??「伝説を読んだのは一人だけのようだな。

んじゃーその小僧、答えろよ。」

瑞稀「さつきから・・・小僧小僧うつさいんだよー！！

俺は女だ！お前だって同じくらいの年だろー！」

出雲「え？・・・そっだっけ？」

ゴチン！

出雲「痛いよー。聖純。瑞稀が殴った！」

聖純「今回は仕方ありませんね。」

??「オレを無視するなよ・・・。まあ前文はオレも悪いから良いとしてどうすんだ？」

瑞稀「どうする？（つても『強制的に仲間になる』って書いてあったけどね。）」

出雲「アイル！」

ゴチン！ ガギーン！

出雲「二人共酷いよー。ちょっとふざけただけなのに。」

瑞稀「で、どうすんだ?」

聖純「瑞稀は?どう思います?」

瑞稀「俺に決定権はないけど、『強制的に仲間になる』って書いてあったからなあ。」

聖純「…そうなんですか。では、出雲は?」

出雲「どうでも良いよ………(イジケ。)」

聖純「じゃあ決まりですね。」

出雲「どっちに?」

瑞稀「仲間にする事にまとまったよ。」

??「そうか、分かった。オレの名前は風牙ふうが 空龍くうりゅうだ。
年は十三才で、とりあえず今から仲間だ。」

出雲「仲間かあゝ。」

瑞稀「……良い響きだな!!(行こうぜ!仲間達!!)」

第二章 仲間（後書き）

できたら感想もご記入宜しくお願い申し上げます。

第三章 武器確定 ｝

第三章 武器確定 ｝

本・・・それは、自分達のが探す道。

その本が4つ全て揃った。

空龍「そういえば、オレしか自己紹介してないけど・・・。」

聖純「あつ、そうでしたね。神良聖純です。一応男で、12歳。水の本を持っています。」

出雲「雷夢出雲、あと27日で13才。男だよ。え〜と、雷の本を持ってるよ。」

瑞稀「火炎瑞稀！・・・12歳。・・・女。火の本を持ってる
！！」

聖純「空龍さんは何月生まれですか？因みに僕は6月で21日です。
」

空龍「オレは4月2日。お前らは？」

瑞稀「俺は7月24日・・・・。結局俺が一番下かよ。」

瑞稀落ち込む

出雲「そうだね。ボクは5月29日。」

瑞稀「空龍は何で刀持ってるんだ？」

空龍「武器だよ、武器。お前ら持ってるないの？」

聖純「持ってますんよ。やっぱり武器について考えましょうか。」

瑞稀「剣・・・くれ。」

空龍「オレが持ってるのは刀！！」

瑞稀「俺は剣が良い！3刀流。」

出雲「え」とボクは・・・」

空龍「剣は無理だな。それなら自分で買え。」

出雲「え〜と……」

瑞稀「え？……何で？」

出雲「え〜……」

空龍「オレは、刀しか作れねえ。」

出雲「……………」

聖純「どうしたんですか？」

出雲「だって、みんなが無視するんだあ！！」

出雲泣く

瑞稀「え？わあ！ごめん！！出雲っ！！」

空龍「……………フッ」

出雲「フッって何だよ！！」

空龍「いやあ、大の男が泣くかなあって。」

空龍笑う

出雲「うつ…………泣いてない。」

出雲泣き止む

聖純「……。さて、本題に戻りますか。」

瑞稀&出&空「「「……本題って……何んだ？（何？）」「」」

ガイン！ ゴチーン！ バシーン！

瑞稀「って！痛てーよ。ガインって……」

出雲「聖純がゴチーンって……ゴチーンって……」

空龍「てーな。本題って何だって聞いただけだろ！」

聖純「……さあ、武器の話に戻しましょう。」

瑞稀「あいよ。じゃあそれぞれ武器をどうするかってか？」

聖純「そうです。空龍は刀だそうなので、出雲！」

出雲「えっ！えーと……鎌……！」

瑞稀「へえー。俺は刀。」

空龍「あれ？変えたのか？」

瑞稀「金に余裕ねえからな。2人分（聖純&出雲）買っただけでも金ねえだろうし。」

空龍作ってくれよ！」

空龍「・・・何本だ？」

瑞稀「3本！んま、頑張れや！」

空龍「おい・・・。てめえも作れよ。」

瑞稀「聖純は？」

聖純「えっ？ああ白魔法なので買う必要ないですよ。」

瑞稀「へえー。じゃあ出雲の武器、一緒に買ってやってよ。俺は準備してるし。」

出雲「何の？」

瑞稀「おい。出雲、旅行くって最初に言ったの誰だ？」

聖純「瑞稀！お金お金！」

瑞稀「良い物買うには50万円くらいか。あいよ。」

そう言つて瑞稀は通帳を差し出す。

聖純「あれ？通帳あつたんですか？」

瑞稀「ああ、俺のお年玉貯めたやつだ、1000万円くらいだな。」

あと、軍で働いて稼いだ金もあるぞ？もう一つの通帳に。」

聖純「ええ！そんなに？」

空龍「まめな奴だな。」

瑞稀「まず、50万円だけ出して買いな！買った後、残り出してきてよ。」

出雲「残りどうすんの？」

瑞稀「えっ？ああ旅費。足りなくなる確立充分だけどな。そんなときは働く。良いだろ！」

聖純「……………まあいいんじゃないですか？」

出雲「働くのは誰？」

瑞稀「全員。」

出雲「……………では行ってきます。」

聖純「行ってきます。」

空龍「……………。」

瑞稀「いつてらっしゃい。」

第三章 武器確定 〵（後書き）

読みにくくてすいません。

劇風な小説になっています。

ただ・・・情景が掴みにくいかも。

でも、でも！頑張ったんで！

コメントを！！

第四章 武器屋へ風封尽

第四章 武器屋へ風封尽

聖純は出雲に引つ張りまわされていた。

聖純「この店で良いですか？」

出雲「嫌だ。違う店！」

テクテク・・・

聖純「ここはどうですか？」

出雲「嫌だ。」

テクテクテク・・・

聖純「ここは？ハアハア・・・。」

出雲「嫌だ。」

テクテク・・・タッタッタタ（走る）

聖純「ここは？ハアハアハアハア。」

出雲「嫌だ。」

結構走らされて、流石に聖純も怒ったようだ。

聖純「（怒）・・・じゃあ何処が良いんですか！」

出雲「・・・・・・武器や《楓封尽》ふうふうじん」

聖純「あの、デパートの中にある？」

出雲「そう。この前良い鎌があつた。」

聖純「あと10分くらい歩く事になりますね。」

出雲「そだね。」

聖純「まあ、自分が使いやすく、良いものなら仕方ないですね。」

テクテクテク・・・

10分後

歩いてたどり着いた場所はデパート。外壁が真っ白のデパートで10階まである。

ここには、色々なものが置いてあり、旅人には最適だ。

出雲「到着〜！」

聖純「流石に疲れますね。30分以上歩きましたよ。走りもしましたけど。」

出雲「じゃあ、行こ〜！」

聖純「3Fですね。エレベーターで上に。」

出雲は先にエレベーター・・・ではなく階段でダッシュして行っちゃった。

聖純「出雲？」

その頃、出雲は・・・

出雲「ここだよ！せいじゅ・・・。聖純？聖純？（泣）」

まったく、せ、聖純の奴、ま、迷子になってやの・・・（泣）」

一方、聖純は・・・

聖純「出雲？？困りましたね。・・・先に《楓封尽》に行っているでしょう。」

《封楓尽》にて・・・

聖純「出雲？・・・先に銀行に行ってお金を下ろしてきますか。」

冷静に判断しているが、やっぱり少し動揺していた。

それと正反対に出雲は、泣いていた。

出雲「ええ〜ん、聖純〜（泣）」

店員「どうしたんですか？」

出雲「あつ、せ、聖純が迷子なの！」

店員「では、アナウンスしてみましょう。」

テクテク・・・

ピンポンパンポン

店員「迷子のお呼び出しを致します。

神良聖純様、神良聖純様、

雷夢出雲様がお探しです。至急、迷子お呼び出しセンターまでおこし下さい。」

5分後

聖純「あつ！出雲！」

出雲「あー聖純！モグモグ・・・」

聖純「出雲？何を食べているんですか？」

出雲「お菓子ー。店員さんがくれたの。」

聖純「出雲（怒）行きますよ。」

出雲「・・・はい。」

そのあと、銀行で金を下ろし《楓封尽》へ。

出雲「やっと着いたー！」

聖純「出雲、どれですか？」

出雲「ええーつとねえ。・・・コレ！」

聖純「いくらですか？」

出雲「51万円!!」

聖純「1万円オーバーですね。」

出雲「あっそう、でも！コレが良い!!」

聖純「仕方ないですね。後の1万円は僕が出しましょう。」

出雲「わーい！わーい！」

店員「51万円です。」

聖純は下ろしてきた金と、自分の1万円を取り出し店員に渡す。

聖純「はい。」

店員「確かにお預かりしました。」

出雲「じゃ、聖純、帰ろ！」

聖純「はい。でもその前にお金を下ろしてから出ないと。」

出雲「疲れてるのにイ〜。」

・ 聖純「そうですか、旅に行つてご飯も無し、水も無し、も無し・

最終的には宿にも泊まれず……が良いんですか、

出雲は。」

出雲「それは嫌だ。銀行に行こう。」

そして、銀行に寄り、家に帰ろうとするのだった。

第五章 武器作り

第五章 武器作り

一方 瑞稀&空龍は

聖純・出雲を送った後、残された瑞稀と空龍は武器を作ろうとしていた。

瑞稀「さてと、武器を作るか。」

空龍「……こ、ここで？」

瑞稀「無理なのか？」

空龍「いや、やろうと思えば。出来るが……」

瑞稀「どうやって？」

空龍「まず、その暖炉に火をつける。」

瑞稀「……命令口調……。」

空龍「ん？」

瑞稀「いや、何でもないです。」

瑞稀は徐にマッチを取り出す。

シュツ！ボウ・・・

空龍「んじゃあ、床に新聞を敷きつめろ。」

瑞稀「・・・はいはい。」

バサツ！ ドサツ！

空龍「次にこの台を暖炉の前に持ってけ。」

瑞稀「無理でしょう。こんなでかいの。」

空龍「持ってけ！」

瑞稀「面倒。」

空龍「もう一度言う、持ってけ。」

瑞稀「面倒だから却下。」

シャキーン（空龍・刀）

キラーン（瑞稀・包丁）

お互い刀・包丁を取りだし、2・3秒静止。

空龍「・・・五分五分か。」

瑞稀「じゃあ、頑張ってー。」

空龍「手伝えよ、一人じゃ持てるわけねえだろ。」

瑞稀「じゃあ、任せるなよ。」

空龍「……ック！」

瑞稀「分かったよ。運びます！手伝います！」

空龍「そっちもて。」

ダンッ！

瑞稀「おい！落とすなよ！床が傷つく。」

空龍「はいはい。じゃあ始めるぞ。」

三十分後

瑞稀「うゝ、上手く作れん！」

空龍「知らねー。」

瑞稀「ああ、良いぜ。それで。自分で作ってやる！」

空龍「……。。。」

そして、また作り直し、

十分後

瑞稀「……っしゃ！出来た！今までで最高の出来だ！刀二本！
！」

空龍「三本じゃなかったのか？」

瑞稀「ああ、後一本は剣！」

空龍「っな！、おい、……この材料じゃ刀しか作れないぞ？」

瑞稀「フッフッフ……。」

タッタッタ・

瑞稀が倉庫に走って剣らしき物を持ってきた。

瑞稀「じゃーん！俺の元剣！だけど、もう使えねえ。真2つだ。
でも、コレで作れるだろ？」

空龍「しょうがねえな。オレが作ってやる。」

瑞稀「あゝれゝ？刀しか作れないんじゃないの？」

空龍「つるせえな。とにかく作る！剣は大変だから、貴様も手伝え
！」

瑞稀「貴様……だと？」

空龍「……他に何て呼べば良い。」

瑞稀「瑞稀で良いよ。それか、瑞稀様（笑）。」

空龍「じゃあ、瑞稀・・・で良い。」

空龍は少し顔を赤くさせていた。

そして、空龍と瑞稀は剣を作り始めた。

空龍「完成！・・・今までで最高の出来だな。」

瑞稀「俺のセリフ・・・。」

空龍「お前・・・瑞稀の作った刀見せろ。」

瑞稀の名前を言った後やはり、顔を赤くする。

瑞稀「いちいち赤くなんなよ。・・・これか？」

空龍「・・・まあまあ・・・だな。」

瑞稀「上出来だろ？」

空龍「・・・ああ。」

瑞稀「張り合いがないなあ。」

空龍「・・・張り合いもないって初めてでここまで作れるのは凄
いと思うけどな。」

瑞稀「やっぱり？」

瑞稀は凄い笑顔で空龍を見る。

空龍「っ！／＼ああ。．．瑞稀．．．一目ぼ．．．」

少しいいムードだったがそのセリフを遮るものが．．．

第六章 瑞稀を求め?!

第六章 瑞稀を求め?!

ガチャ、タッタッタ

瑞稀「帰ってきた!」

空龍「そうだな／＼」

空龍は何を言おうとしたか知らないが、やはり赤い。

瑞稀「お帰り!」

聖純「ただいま。」

出雲「ただいま!!」

空龍「……。」

空龍の赤みはいつの間にか消えていた。

聖純「暑くないですか?この部屋。」

出雲「あゝ確かに。」

瑞稀「おっと、……よろしく。」

瑞稀はそう言って、空龍の肩を叩く。

空龍「何でオレが!!」

瑞稀「さあ換気〜!換気!」

空龍「おい・・・。」

瑞稀「はっはっは。」

空龍「・・・(怒)」

聖純「換気終わりましたよ!」

出雲「終わった!」

瑞稀「・・・皆ではめ?」

空&出&聖「」「フッフ・・・」「」「」

瑞稀「さーて、夕食の支度を。」

空龍「おい・・・」

聖純「あつ瑞稀、お金です。丁度・・・」

空龍「おい。」

出雲「おなかすいたあ!」

空龍「おい！」

瑞&聖&出「」「てな訳で、空龍やっついて（ください）。」「」

空龍「おい！！！」

瑞稀「やってくれないと飯食わせねーぞ！」

聖純「そうですと。新入りなんですから。」

空龍「瑞稀は夕食作るからともかく、てめえらは手伝えよ！」

聖純「嫌ですねえ、この人は。初日から瑞稀を名前で呼んでいますよ？」

出雲「ねえ。瑞稀は一応女の子なのに。」

瑞稀「一応かよ！」

空龍「瑞稀！お前の剣作っただ！責任取れ！」

瑞稀「仕方ないな。聖純適当に何かつくつといて。」

聖純「分かりました！。出雲手伝ってください。」

空龍、僕の瑞稀に手を出したら殺しますよv」

瑞稀「僕のつて・・・聖純のものになった覚えはない！」

冷静に叫んだ。

聖純「まあ冗談はおいといて・・・」

聖純は空龍に瑞稀には聞こえないように耳打ちした。

空龍「っ！／＼／＼／！」

空龍を此処まで赤くする言葉はこつだ。

『瑞稀は空龍の事気にかけてますから今がチャンスですよ。
でもチャンスは今日だけですけどね。僕も瑞稀のこと好きなんで』

瑞稀「？」

聖純「では、片付け宜しくお願いします。僕たちは買い物に行つて来るんで。

二丁三 時間くらいかかると思いますよ。（笑）」

瑞稀「やけに長えな。」

聖純「空龍が新に仲間に加わりましたし。僕たちが出会って丁度百日ですからね。」

瑞稀「なるほど。」

聖純「では行ってきます。」

第六章 瑞稀を求め?! (後書き)

第6話目です!・・・昨日は更新できなくてすいませんでした。懲りずにまた覗いてってください!

第七章 思わぬ事故

第七章 思わぬ事故 〽

瑞稀「また二人かよ。」

空龍「さ、早く片付けるぞ。」

瑞稀「そうだな。」

片付け始めるか二人

二十分後

瑞稀「終わった〜!」

空龍「……。」

瑞稀「どうした? 顔赤いぞ? 気分でも悪いか?」

瑞稀は空龍の額に自分の額をつける。

空龍「なっ! / / / !」

空龍は思わず、瑞稀を突き飛ばす。

ガンッ!

瑞稀「っ!」

あろう事が、瑞稀は暖炉に思いつきりぶつかってしまったのだ。

そして、頭を打ちつけ、右手もぶつけてしまったのだ。

空龍「あつ…悪イ!!」

瑞稀「……………」

瑞稀からは返事はなく。気絶しているかのように思えた。

空龍「…………生きてるか?おい……………」

空龍は凄いいどおどしていた。

死んでしまったかと、思っていたようだ。

瑞稀「…………(怒)。俺がんな簡単に死ぬかよ!つーか痛えじゃねえか!」

空龍「…………生きてる。…………ふう。」

瑞稀「ふうじゃねえよ!見ろこの血を!そして手を!」

瑞稀の頭からは少しだが血が流れていた。

そして手は…………動かないらしい。

空龍「つ!!!」

空龍は瑞稀の手を引っ張って外に出ようとする。

瑞稀「ど、何処に行くんだよ！」

空龍「病院だ！」

瑞稀「そこまでする必要ないって。」

空龍「……。」

空龍は瑞稀を背負う。

瑞稀「なっ！／＼／。」

空龍「動くな。」

瑞稀「……。」

空龍は瑞稀を背負い病院へ直行した。

今回は短かったですね。さて、瑞稀はどうなるのか！！
これからのbond of flame（炎の絆）もお願いします
！！

第八章 焼肉

第八章 焼肉

瑞稀が怪我をしたことを知らない出雲と聖純はのんびり買い物をしていた。

出雲「今度はデパートには行かないんだね。」

聖純「デパートよりスーパーの方が安いですね。」

出雲「今日の夕飯は何？」

聖純「豪勢に焼肉なんていかがでしょう？」

出雲「え？焼肉？わーいわーい！！」

聖純「…今度は迷子にならないで下さいね。」

出雲「うつ・・・。」

そうして、二人は肉売り場に行く。

出雲「このお肉がいい。」

それは、ステーキ用の分厚いサーロインだった。

聖純「いや、ステーキじゃないんですから。」

出雲「これを薄くできれば問題ないよ！」

聖純「そうですね。・・・では奮発しちゃいますか。」

出雲「やったー！！」

そうして、サーロインやらバラ肉やらカルビやら色々な肉を籠に入れた。

次は野菜売り場に行くようだ。

出雲「・・・野菜嫌い。」

聖純「駄目ですよ、好き嫌いは。」

出雲「・・・きつと、みんなも嫌いだよ！！」

聖純「皆とは誰ですか？瑞稀は野菜大好きですよ？

僕も好きなわけではありませんが、食べますし。空龍も食べる思いますよ。」

出雲「そ、そう。で、でも！今は野菜高いよ！！」

聖純「今日は奮発して豪勢にしますから大丈夫です。

しかももう少ししたらタイムセールで野菜の詰め放題で1袋500円ですから。」

出雲「そうね。じゃあ瑞稀に食べさせてもらおうと！」

聖純「抜け駆けは駄目ですよ。（笑・ブラック）」

出雲「・・・はい。」

聖純「そういえば、あの二人大丈夫でしょうか？」

出雲「平気なんじゃない？瑞稀、意外としっかりしてるし。」

聖純「そうですね。」

あと1分でタイムセールが始まります。準備をしてください。

聖純「始まりますよ！出雲！準備です！」

出雲「はい！隊長！」

そうして、野菜の詰め放題が始まった。

聖純「結構詰められましたね。」

出雲「そうだね。」

聖純「そろそろ三時間なんで、帰りますか。」

出雲「そうだね。」

そして、家に向かうのだった。

聖純「ただいま。」

出雲「ただいま！・・・あれ？瑞稀？空龍？」

聖純「いませんね。」

出雲「どうしてだろう？」

聖純は暖炉の方を見た。

聖純「血？！瑞稀のしょうか、病院に居るかもしれません！」

出雲「い、行こう！！」

二人は帰ってきてそうそう、病院に向かう。

瑞稀の容態はどうなのだろうか。

第九章 診察

第九章 診察

空龍は走って病院に向かっていた。

瑞稀「そんなに走るなよ！」

空龍「黙ってる。」

瑞稀「・・・大丈夫なのに。」

そして、病院に着く。

空龍「医者は何処だ？こいつが、瑞稀が怪我したんだ！」

空龍は病院に入るなりそう叫んだ。

瑞稀「馬鹿、病院だ静かにしろ！」

瑞稀も少し小さい声でそう叫んだ。

看護師「どうしましたか？！」

空龍「瑞稀が怪我したんだ！」

看護師「では、診察室へ！」

瑞稀「別に良いのに。」

そうして、三人は診察室へ。

そこには医者が出た。

医者「どうしたのかね若者よ。」

瑞稀「若者かよ！」

空龍「頭と、手を・・・！」

瑞稀「落ち着け、空龍。」

医者「何だ男か。」

医者は空龍を診てガツカリした。

瑞稀「いや、そいつが怪我してんじゃねえよ。」

医者「ああこつちか。こつちも男・・・っ！頭・・・血が出ているではないか！」

空龍「あと、手が動かないらしい。どうにかしてくれ！」

瑞稀「落ち着けー！・・・俺男じゃねーし！」

医者「まず、えーと、何て言ったかなレントガン撮るぞ！」

看護師「先生！レントゲンです！」

瑞稀「大丈夫か？この医者。」

瑞稀はレントゲンを撮る為移動した。

空龍は着いてきてはいけないと言われ廊下のベンチに座っていた。

瑞稀「頭のレントゲンか……。頭蓋骨が写るのか？」

ピー パシャッ！

瑞稀「ピーって何だ？ピーって……」

医者「次は手だ。」

瑞稀「アイアイサー。」

ピー パシャッ！

瑞稀「さー終わった、終わった。」

そして、空龍も加わり、再び診察室へ。

空龍「どうだったんだ？！」

瑞稀「ピーって言った。」

空龍「ピー？」

瑞稀「レントゲンがピーってね。」

空龍「いや、結果だ、結果！」

瑞稀「これから言われんだろう？」

空龍「そ、そうか。」

医者「・・・骨折。」

空&瑞「え?!」

医者「頭蓋骨、右手の甲、共に骨折です。」

瑞稀「なんだとお!？」

空龍「・・・どうしよう。」

瑞稀「何がだ？」

空龍「男っばいとはいえ、女に怪我をさせてしまった。」

瑞稀「・・・気にするな。」

医者「ギプスをはめる、そのベッドに横たわれ。」

瑞稀「はいはい。」

瑞稀はベッドに横たわった。

医者は頭、手にギプスをつける。

第十章 瑞稀の嘘

第十章　　瑞稀の嘘　　

瑞稀「うわー、かつこ悪。」

空龍「……………」

瑞稀「…………気にするなつて。」

空龍「……………」

そして廊下に出る。すると、聖純と出雲がいた。

聖純「瑞稀！どうしたんですか？！その包帯！！空龍にやられたんですか？！」

瑞稀「いや、片付けしてたんだけどさあ。」

ボール踏んづけて派手にこけて、暖炉にぶっかった

空龍「……………」

出雲「何で空龍は黙ってるの？」

聖純「瑞稀嘘ついてません？」

出雲「ボクは瑞稀を傷つける奴と一緒にいたくないよ。」

瑞稀「何で決めつけるんだよ。」

空龍「……………」

聖純「だって、さっきから空龍喋ってないじゃないですか!」

瑞稀「それだけで決めつけるなよ!」

出雲「だって、今日初めて会ったし、

本当は伝説利用してるボクらの敵かもしれないじゃんか!」

瑞稀「…………何で人を信じないかねえ。こいつ等は。」

聖純「瑞稀が怪我してるんですよ?こけただけじゃそんな怪我はしませんよ!」

瑞稀「ボール踏んづけたんだって。」

出雲「じゃあ何で空龍が黙るんだよ!」

瑞稀「心配してくれてんだろ?」

聖純「…………納得はいきません…………ところで結果はどうだったんですか?!」

瑞稀「別に、ただ血が出ただけ。空龍がさあ、大げさなんだよ!

暖炉にぶっかって怪我したくらいで病院行くわ、

医者には医者でいきなりレントゲン撮るし…………」

空龍「悪かったな、大げさで。」

瑞稀「本当、大迷惑だ。病院行くまではいいけど結局指のつき指だ
けじゃないか！」

聖純・出雲に心配かけないように必死な瑞稀を見て空龍は赤くなる。
空龍「・・・・・・／＼。」

瑞稀「何故そこで赤くなる！」

聖&出「・・・・・・。」

聖純「お医者さん。診察結果くれませんか？」

瑞稀「聖純、人のプライバシーを・・・・。（ヤバイ、限りなくヤ
バイ！！）」

聖純「一応結果は知つとかないと。」

瑞稀「俺は一応女だぞ？コノヤロー。」

出雲「そうだっけ？」

ガイン！

瑞稀「今日この展開2回目だあ。」

空龍「瑞稀、金。」

瑞稀「ああ、診察料ね。」

看護師「入院は？」

瑞稀「する必要ないだろ。つき指だけで。（余計な事は言っなー。）

」

看護師「医者が一応頭をぶつけたんで安静にと言ってたのですが・
・」

瑞稀「ああ、家で安静にしますよ。」

聖純「診察料はいくらですか？」

聖純は財布を持って払おうとしていた。

瑞稀「ああ、軍に請求しといて。レントゲン高いだろ？えーと、軍
の大将に……。」

聖純「た、確かにお金一万円もありませんでした……。」

出雲「野菜買わなければ。」

聖純「野菜は必要ですよ。」

瑞稀「今日は何なんだ？」

出雲「焼肉だよ！」

瑞稀「空龍。お前、大丈夫だよな。肉と野菜。」

空龍「あ、ああ！大好物だぜ！オレには好き嫌いはない！」

瑞稀「よし！それでこそ男だ！出雲！頑張れ！」

出雲「うつ・・・。」

聖純「では帰りますか。」

瑞稀「そうだな。」

そして4人は家に帰るのだった。

瑞稀は骨折の事は話していない。それが空龍のせいだという事も。

瑞稀は嘘をついたが、それは聖純と出雲に心配させない為だ。

それと、空龍が自分を責めないように・・・

第十一章 空龍の一目惚れ

第十一章）空龍の一目惚れ）

瑞稀「飯だー！！」

聖純「出雲、鉄板出してください。」

出雲「これで良い？」

聖純「良いですよ。では、焼きますか。」

瑞稀「・・・空龍は？」

聖純「さあ。」

瑞稀「聖純怒ってる？」

聖純「そりゃあ怒りますよ。空龍のせいじゃないとはいえ瑞稀に怪我させるなんて。」

瑞稀「いや、俺勢い良かったからなあ。暖炉に突っ込んでいったもん。仕方ないさ。」

出雲「見てみたかったなあ。」

瑞稀「何だそれ。まあ良いや、空龍探してくるから先焼いててよ。でも、喰うなよ！」

そう言い残して瑞稀はリビングを出る。

家の中を歩き回っていると、暖炉の所に空龍がいた。

血を拭いているようだ。

瑞稀「何やってんだ？」

空龍「うわっ！びびった。・・・血を拭いてんだよ。」

瑞稀「別に目立たないから良いのに。」

空龍「・・・ごめんな。」

瑞稀「大丈夫だ。」

空龍「嘘、ついて良かったのか？」

瑞稀「あいつ等、凄えおせっかいだから良いんだ。」

空龍「・・・。」

瑞稀「あまり、黙つてるとあいつ等以外と鋭いから怪しまれるぞ？」

空龍「あいつ等、あいつ等って詳しいんだな。・・・好き、なのか？」

瑞稀「んな訳ねえだろ、2人共女っばいし。」

こん中で一番男っばいの俺って言われてんだぞ。」

空龍「男っばいのが好みなのか？」

瑞稀「俺よりも、な。」

空龍「なあ、一目惚れって信じるか？」

瑞稀「さあ、俺は一目惚れ何かした事ねえからな。」

空龍「・・・そうか。」

瑞稀「それがどうかしたか？」

空龍「いや、なんでもない。」

空龍は少し赤くなっていた。

瑞稀「何だ？俺が好きか？」

空龍「なっ／＼／＼！」

空龍は更に赤くなった。

瑞稀「え？マジ？凶星？」

空龍「な、なっ！／＼／＼／＼！」

瑞稀「お前も変な趣味だな。」

空龍「・・・悪かったな。」

瑞稀「でも俺、お前の事嫌いじゃないぞ？」

空龍「え？マジかよ／＼／＼！」

瑞稀「お顔が真っ赤ですよ。空龍さん。」

空龍「・・・／＼／＼」

瑞稀「さてと、焼肉喰いに行くっ！・・・」

瑞稀の言葉を遮るものがあつた。

それは、空龍の唇だつた。

だが、2・3秒で離れた。

瑞稀「っ!！」

空龍「・・・／／／／」

空龍は走って行ってしまった。顔を真っ赤にして。

瑞稀「／／／なっ何なんだよ、あいつ。」

その後、瑞稀はリビングに行った。

聖純「どうしたんですか？瑞稀。」

出雲「空龍もう来てるよ。」

瑞稀「別に何でもないさ。／／／・・・さあ!喰うか!」

聖純「瑞稀、顔が赤いですよ?」

瑞稀「この部屋が暑いんだ。」

出雲「焼肉焼いてるからね。」

空龍「さあ、喰うぞ!」

瑞稀「・・・ああ!俺右手使えねえじゃん!」

空龍「瑞稀の分も喰ってやるから安心しろ。」

瑞稀「あっひでー！！左手でも喰える！空龍よりも多く喰ってやる！」

空龍「負けねえぞ！」

出雲「ボクも負けないよ！」

聖純「どうでも良いですけど肉焦げますよ。」

出雲「凄い！瑞稀野菜をたっぷり食べてる！」

瑞稀「野菜は良いぞー。出雲も食べる！」

出雲「ボクも？！」

空龍「早く喰わねえと無くなるぞ！」

瑞稀「あつてめえ！」

こうして楽しい夕飯は終わった。

第十二章 名付け

第十二章 名付け

瑞稀「ああ、今日という一日は長かった。」

出雲「何いってんのさ、瑞稀。」

瑞稀「いや、だって色々ありすぎただろ今日は。」

聖純「そうですね。僕らが出会って百日目だって言いますし。仲間
は増えますし。」

瑞稀には怪我をしますし…。大変な一日でした。」

瑞稀「風呂入ってくる。そしたら、すぐ寝る。」

と、瑞稀はリビングを後にした。

聖純「布団でも敷きますか。」

出雲「ねえ、うちって布団三枚しかないよね。空龍どうするの?」

聖純「ああ、どうしようね。」

空龍「なんだよ、その投げやりな態度は。」

聖純「別に床で寝てれば良いんですよ。」

出雲「でも少し痛そうだからせめて、マットの上のほうが良いんじ

やない？」

聖純「出雲は優しいですね。では、マットの上ということぞ。」

空龍「なっ…まあ良いけどよ。」

その頃瑞稀は…

瑞稀「いってー。っーか、かなりの量の包帯巻いてくれたんだな。」

包帯を取っていた。ギプスも一旦はずした。

瑞稀「…左手で頑張るか。」

などとぼやきながら左手で髪を洗ったり、体を洗ったり…

瑞稀「よし、あがるか。」

風呂をあがった瑞稀はリビングへと向った。

包帯などでやや時間がかかったが。

瑞稀「次どーぞ。」

出雲「じゃあ僕入る。」

聖純「大丈夫ですか？瑞稀。」

瑞稀「ん？何が？…ああ怪我が。大したこと無いよ。んじゃ、おやすみ。」

聖純「おやすみなさい。」

出雲「おやすみ！」

瑞稀「ん、おやすみ。……って出雲風呂出んの早いだろ。」

出雲「そんなこと無いよ。今は空龍が入ってるよ。」

瑞稀「……まあいいや。今日は疲れた。おやすみ。」

聖純「無理しないでくださいね。」

瑞稀「分かってるよ。」

瑞稀はそう言い残して寝室へ向った。

瑞稀「何か……。疲れたけど……。寝れそうにねーや。」

そう言って瑞稀は先ほど作った剣と刀を見、1本の刀を持ち上げた。

それは瑞稀が初めて作った刀だ。

柄が紅色をしていて、龍を模った刀だ。

瑞稀「緋色の龍。『ひりゅう緋龍』」

瑞稀は刀に名をつけた。

次に2本目の刀を取り出す。

その剣は柄は灰色と赤。赤は炎の赤。灰色はその赤が暴走しないようにと。

そんな願いを託した色。

そして、鼠のように舞う炎を模った。

瑞稀「鼠の炎。『そえん鼠炎』」

三本目。

瑞稀にとっては宝のような剣。

昔使ってた。家族がくれたたった一つの剣。それを空龍に直してもらったもの。

家族代々受け継いできたものなのだ。

「炎帝^{えんてい}」 炎の神。炎の帝。

これを授かったものが神となる。

瑞稀は神の事までは知らなかったが、大切な物だと聞いたもの。

柄は炎。いや、もっと大きなもの。火炎を模っている。

瑞稀はこう名をつぶやく。。

瑞稀「『螢^{けい}』」

瑞稀は螢を持って外に行こうとした。

あれから随分時間も経ったし。2人共もう爆睡する時間だったから

最終章 最後の夜・最後の朝

第十三章 最後の夜・最後の朝

瑞稀「ふう。涼しい。」

空龍「何言ってるんだよ。まだ5月だから当たり前だろ。」

瑞稀「あつ……。空龍じゃなか。何してんだよ。」

空龍「あの2人、俺に寝る場所くれねーから。」

瑞稀「あつそうか。俺のベット使っても良いよ。」

空龍「お前は？」

瑞稀「俺は買出し。やっぱ明日から旅行きたいからね。」

空龍「この時間にか？」

瑞稀「うん。売ってるよ。『風封尽』なら。」

空龍「送ってく。」

瑞稀「良いよ。どうせ、歩くから。」

空龍「俺は風の神だぞ？」

瑞稀「……。神？」

空龍「知らなかったのか？風の所持ってるって言ったじゃねえか。」

瑞稀「本と神って一緒なのか？」

空龍「ああ、本に選ばれて、所持してる奴がその属性の神。」

瑞稀「・・・じゃあ、俺は炎の神？もしかして『炎帝』？」

空龍「ああ。そうなるな。」

瑞稀「俺が炎帝かあ。じゃあ、本が真つ白なのって呪文でも書いてあるのか？」

空龍「そうだ。自分が神だと自覚して、それをしっかりと意思を持って呪文が読める。」

瑞稀「へえ。帰ったら見てみるか。」

空龍「呪文は、俺はまだ5個くらいだけど。

心の強さ・体力・知力・自覚などによって数が変わる。
あと経験で増えていく。」

瑞稀「俺、何個だろ。まだ見えないかもな。」

空龍「じゃあ、行くぞ。flight。」

空龍が何かを唱えた。

すると、風封尽についた。

瑞稀「スゲエ。じゃあ、大量に買っても平気だな。」

空龍「ああ、多分。」

瑞稀は物を物色し始めた。そして、レジへ向った。

店長（女）さんが言った。

店長「あれ？瑞稀君じゃない。また図ったわね。今の時間のタイムサービス。」

瑞稀「この時間が一番やすいですからね。」

店長「まったく。まあ良いわ。」

かなりの量だけどタダ。こんな量買って事は、旅に出るのね。」

瑞稀「はい。出来れば明日。遅くても1週間後には。」

店長「悲しいわね。瑞稀君が居なくなるのは。」

瑞稀「大丈夫ですよ。」

瑞稀は微笑んで店長さんを見た。

店長「旅中でも欲しい物があつたら何でも言ってね。はい、電話番号。」

すぐに振り込んであげるわ。」

瑞稀「有難うございます。とても、助かります。では。」

店長も微笑んでバイバイと手を振った。

そして、瑞稀と空龍は店を後にして大量の荷物を持って空龍の術で家に着いた。

瑞稀「あーあ。もう4時じゃないか。」

空龍「そうだな。」

瑞稀「少し寝なよ。俺は火の本を見てくる。」

空龍「／／／なあ、一緒に寝ないか？」

瑞稀「・・・はあ？俺は眠くない。勝手に寝てろ。」

空龍「・・・なら良い。」

瑞稀は本を取って何処かに行ってしまった。

瑞稀「何なんだ、あいつは。」

さて、と、本を開く。

瑞稀「あっ・・・。」

呪文が書いてあった。呪文は英語だった。

見たところ、6個あった。

瑞稀「空龍に勝った。」

微笑んだ。

そして、本に触れていたら不意に、思い出した。父さんのこと。

涙が出そうになったけど堪えた。

何故思い出したのかは分からないけど。

乗り越えてきた辛い事、楽しかったこと、うれしかった事、悲しかったこと。

それが心の強さかな？と思った。

そしたらまた、呪文が増えた。

7個。7個の術。

[Fire] [Flame] [Shimmer] [Heat]
[Invitation to freedom] [Fier
ry zeal] [antipyrctic]

7個。

そして、朝になる。朝食を作る。

聖純「あれ？瑞稀？！」

瑞稀「何だよ。」

聖純「珍しいですね。瑞稀が早起するなんて。」

瑞稀「だって、今日旅でるんだもん。」

聖純「今日ですか!！」

瑞稀「うん。」

聖純「支度はすぐに出来ますけどね。・・・まあ良いでしょう。」

瑞稀「よっしゃ!！」

聖純「出雲を起こしてきましょう。」

瑞稀「じゃあ空龍起こしてくるよ。」

そういつて4人がリビングへと集まった。

瑞稀「今日旅に出ることになりました。」

出雲「ほんとに!！やったあ!！」

瑞稀「なので、今日がこの家での最後の朝食です。だから、ホットケーキで!！」

出雲「やった!！大好きホットケーキ。」

聖純「祝い物でもないですけどね。」

瑞稀「良いんだよ。日常的で。」

空龍「確かに日常的な朝食だな。」

そうして、出逢って1日を過ぎ。旅へ。

でもまだ。このお話は終わらない。

最終章 最後の夜・最後の朝（後書き）

最終話ではありませんが、まだおわりません。
まだ、続きを書きたいと思います！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7045a/>

bond of flame ~ 炎の絆 ~

2010年12月31日06時41分発行